

大阪市北区堂山町の系譜 性的表象と都市をめぐる試論

山田 創平¹⁾
YAMADA Sohei

1. はじめに

本論では大阪府大阪市北区堂山町について述べる。地域の状況に対する言及には、伝統的な地理学的手法であるところの各方法論からはじまり、資本の移動、人口動態、建築様式、統治のシステムといった、経済学や法学、建築学といった様々な立場からのアプローチがありうる。本論では、そのような多様なアプローチの可能性を見すえつつ、とりわけセクシュアリティ、さらにはセクシュアル・マイノリティの状況を起点とし、大阪府大阪市北区堂山町（以下、堂山町）の状況に言及したい。

2. 都市とセクシュアリティ

私は1999年に東京都新宿区新宿二丁目においてフィールドワークを行った。²⁾そして、いわゆる「新宿二丁目」が「同性愛者の集まる街」として認識されるようになるまでの流れをたどったうえで、この場所が確実に、いわゆる「ゲイタウン」としてのアイデンティティを獲得していること、そして、そのアイデンティティは多様なセクシュアリティの表面化によって複雑な形をとりつつあり、そのような複雑な形は新宿二丁目の都市構造に変化をもたらしていると指摘した。

都市とセクシュアリティの関係を考えるとき、それは同時に、その都市を含む文化圏とセクシュアリティの関係を考えることにもなりうる。都市はいわば文化的な状況そのものであり、その意味で都市は巨大な言説の編制であるとも言えるのである。ここでは1999年に実施したフィールドワークとその分析について簡潔に触れ、堂山町の状況に対する言及につなげたい。

新宿区における地区名は、JR 新宿駅をはさんで西側を西新宿、北西を北新宿、東側を新宿と称する。JR 新宿駅を挟んだ新宿と西新宿、北新宿の外周には町域が広がる。新宿二丁目の南側には内藤町があり、このような町域が新宿区の大半を占める。新宿二丁目への交通は徒歩、

バス、自家用車、自転車、地下鉄、JR、小田急線、京王線、西武新宿線が想定される。新宿2丁目への徒歩圏内における街区の住居比率は当該地域が商業地域の指定を受けていることから極めて低い。しかしながらフィールドワークの結果から、新宿2丁目の周辺に居住し、そこから徒歩によって当該地域への移動を日常的に行うというケースが多く存在することがわかる。バスは主に渋谷からの移動手段として有効であるが、新宿2丁目への移動においてバスが使われるケースは稀である。自家用車の使用も稀であり、新宿2丁目の区域内に駐車場がほとんど存在しないことから、自家用車の使用は避けられる傾向にある。当該地域の中央を縦断するいわゆる「仲通り」は夜間に自動車の交通量が増し、南から北への一方通行でありながら、渋滞が恒常化している。この場合の自動車の多くはタクシーである。自転車の使用も少ない。当該地域への移動においてその主流を占めるのは鉄道である。最寄駅は地下鉄都営線新宿三丁目駅であり、次いで東京メトロ丸の内線、新宿御苑前駅である。地下鉄都営線新宿三丁目駅は新宿2丁目に隣接しており、同線が大学の密集する東京西部から新宿三丁目へと至るため、また新宿以西において京王線と同じ路線を通過することなどから、極めて有効な交通手段となっている。東京メトロ丸の内線、新宿御苑前駅は新宿以東からの移動に有効であり、JR東京駅から新宿2丁目への直接移動に利用される。JR新宿駅から新宿2丁目までは、いわゆる「アルタ（アルタスタジオビル）前」で知られる新宿駅東口から約800メートルである。

新宿2丁目内には太宗寺、成覚寺、正受院の3つの寺院が存在する。これらの寺院は同地域の成立に深く関わっている。太宗寺は作家夏目漱石が満1歳の時、養子として太宗寺裏に住んでいたことで知られている。当時当該地点は内藤新宿北裏町と呼ばれていた。漱石の作品においては「道草」に当時の様子を見ることができる。太宗寺近辺には妓楼「伊豆橋」があった。「伊豆橋」に限らず当該地域は江戸期（新宿はもともと元禄11年、1698年から宿場町となった）から宿場町として知られていた。

街道の宿屋には当時「飯盛女^{おしやく}」が住み込み、給仕や雑用を行い、同時に売春を行った。江戸幕府は「飯盛女」は1宿につき2名までと定めたが、一向に守られる事はなかったとされている。飯盛女の待遇は劣悪で、死に至る場合が多く、その場合着物や飾りを剥ぎ取ったあと米俵にくるんで成覚寺に投げ込まれた。

大正9年にそれまでの街道沿いから公式の遊郭が当該地域へ移った背景にはこのような遊所としての歴史的な背景がある。大正9年の遊郭の移設以降、最盛期には53軒の遊廓が存在した。戦後、一時衰退するものの昭和21年に赤線と呼ばれる公認の売買春地域に指定され、昭和26年には459人の売春婦を抱えるまでにその規模を回復する。その後昭和33年の売春防止法施行により、遊郭としての新宿2丁目は衰退する。新宿2丁目³⁾が異性間売買春から離れ、「同性愛者の集まる街」と広く認識されるのはそれ以降のことである。

新宿二丁目の「交通の要衝」としての立地の良さは、いわば「街道」として成立した同地域の系譜に連なるものだが、やはり特筆できる点はそのような街道沿いに成立した遊郭からの流れである。飯盛女の待遇からも推察できるように、同地域では性的な状況の下、著しい抑圧を被っていた人々がいた。そしてその場所がそのまま「同性愛者の集まる街」として変化してゆく。写真1は現在の甲州街道だが、この場所は映画『二十歳の微熱』（橋口亮輔監督、1993）において、夜明け前に新宿二丁目から新宿駅へと向かうラストシーンの舞台となった。甲州街道、内藤新宿の同性愛的表象による再読であり、この場所の「意味」の変化を表していると言えるだろう。



(写真1)

都市が文化的な状況であるならば、そのような変化は偶然ではない。そのような地域の変化が現れるには、理由があるはずである。

同様の事例を上野でも確認することができる。

銀座の高級クラブ「青江」の経営者として知られた青江忠一は戦後まもなくの上野の状況を次のように描写している。

上野駅で降りて、不忍池の方へ下って歩いていると。ズラーツと並んでいるのよ、いわゆるオカマが。4, 5メートル間隔で、もう何十人、何百人いたかわからないわ。その前を通るたびに、「お兄さん遊んでいかない」って声をかけられんだけど、それが汚いやつばかり。⁴⁾

また、劇作家唐十郎が後に『下谷万年町物語』として戯曲化したことでも知られる上野の森警視総監暴行事件(1948)は、上野が同性愛者、とりわけ大阪釜が崎から移住してきた売春従事者が集まる場所としての認知を世にもたらすきっかけとなった。紀田順一郎は著書『東京の下層社会』(1997)において次のように記している。

JR 線上野駅の浅草口を出て前方を見渡せば、だれでもまず正面に架かった首都高速1号線と、その真下に昭和通に面して軒を並べる銀行や証券会社が目に入ることだろう。そのビルの並びの左端から浅草通りがはじまっていて、歩くにつれてパトカーの待機する上野警察署が目に入る。約100年まえ、このあたり一帯には下谷万年町という、東京有数のスラムがあった。⁵⁾

新宿二丁目、または上野の地域成立の流れをセクシュアル・マイノリティの状況に沿って概観しただけでも、我が国における同性愛的言説は常に体制の外部に位置づけられてきたことが示唆される。新宿二丁目がゲイタウンであるといわれながら、その内実がバーや売春施設、ハッテン場などの商業施設⁶⁾がほとんどであり、日常的な生活の場とはなっていない点も、この文脈から読み解く必要があるだろう。また、稚児之草子(1321)にまでさかのぼり、そこから1873年の明治新政府による鶏姦条例までの間、我が国には同性愛差別がなかったとした上で、その伝統が現在も続いているとする言説に対して一石を投じる可能性も読みとれるだろう。東京における同性愛者の集まる地域の成立の歴史を見る限り、我が国には同性愛者に対する差別があり、それは、言説の来歴を見る限り、あまりにも根深い抑圧の構造に組み込まれていると言わざるを得ない。

3. セクシュアリティと都市の二重構造

2001年2月、筆者は池袋にある風俗店を取材し、従業員と経営者ともにインタビューを行った。それは次のようなものであった。

かつて（新風俗営業法施行前）は通りに面した単独の店舗を構えることが多かったが、現在ではマンションの一室などで経営するような小規模経営化が進んでいる（ただしこれらのほぼ全てに違法性がある）。

いわゆるブルセラブームにより、従業員の衣装がセーラー服などの学校用制服になった。そして、店内にも学校の教室や体育倉庫が再現されるようになった。

やがて店内に電車の内部が再現されるようになり、それ以外にも様々な場所（公園であったり、バルコニーであったり）が再現されるようになっていった。

場所の再現が求められる理由は次のように説明されるだろう。

つまり、電車が純粋に「移動の手段」としての役割を果たしてはいないがゆえに、あるいは教室が純粋に「教育の場」としての役割を果たしてはいないがゆえに、それらは存在する。

それは違法を合法とするための一つ的手段である。性的であってはならないとされる場所に、性を持ち込むための一つ的手段である。それは純粋に、倫理的に、社会的に当然であり、「まっとう」であるとされる乗客（あるいは教師）と、性的で、倫理的に、社会的に「不当」であるとされ、処罰の対象とされる乗客（あるいは教師）という2つのアイデンティティの亀裂であり、相克の現場である。

電車はすでに「純粋な移動の手段としての電車」というアイデンティティを失っており、すでに性的な空間になっていて、それは風俗店の内装という現実の都市空間、建築空間にも変更を求めているのである。しかしながらそのことは表向き、公式には決して示されることはない。その意味であらゆる生活空間はセクシュアリティをめぐって二重の底を持っていると言える。いわばそれは「公式」な空間と「非公式」な空間であり、それらは別々に存在するのではなく、見事に重なっていると言ってよいだろう。ただ、性的空間は「語る」か「語らない」か、「知っている」か「知らない」か、同意が「ある」のか「ない」のかといった様々なコードによって隠蔽される。ソーブランドの営業形態はその代表的な事例である。⁷⁾

4. 地名としての堂山町と表象としての「堂山」

堂山町の町名は『大阪府地名大辞典』⁸⁾において以下のように説明される。

明治33年 現在の北区の町名。大正13年までは北野と冠称。もとは北区北野の一部。町名

は太融寺のお堂があったことから名付けられた。大正13年一部が万歳町となる。昭和53年一部が中崎西1 4丁目、万歳町、神山町となり、高垣町、太融寺町、曾根崎1 2丁目、小松原町の各一部を編入。

北野という呼称は、現在も扇町公園に隣接する北野病院などに見ることができるが、大阪天満宮発行の『てんま 風土記大阪 』⁹⁾によると、「北野」という呼称は古くから使われていたようで、現在も「北野地区」として一般的に用いられている。『てんま 風土記大阪 』は以下のように記している。

『摂津志』を見ると、「兎我野，北至天満北野，南至京橋町平野町之惣名，座摩社記作都下，又名渡辺」と記しており、(中略)いわゆる北野地区には兎我野町・小松原町・高垣・角田町・堂山町・神山町・西扇町・南扇町・野崎町・太融寺町・西寺町1丁目・2丁目が含まれるであろう。(中略)太融寺町は、明治三十三年四月の町名改正により、北野太融寺町と呼ばれたのに端を発し、それ以前は西成郡北野村であり、江戸時代には大阪三郷に編入されておらず、天満組の北方に位置し、曾根崎村と隣接していた。

『摂津志』は『日本輿地通志畿内部』に所収されており、1734年に編纂されている。いわゆる大阪城を中心とした町域にあたる大阪三郷¹⁰⁾に編入される以前、現在の北野地区はすでに北野と呼ばれており、曾根崎と隣接していたとある。『摂津志』によると当該地域は広く「兎我野」と呼ばれていたようだ。『大阪府全志』¹¹⁾では、現在の北区兎我野がその中心であったとしている。兎我野は日本書紀の中に仁徳天皇の行幸地として登場するが、日本古典文学大系¹²⁾では、当該地域は摂津国八田部郡にあたりと推定している。歴史家、八切止夫は「八田」は現存する三ヶ所を含め全て「別所」としてしている。¹³⁾この点に関して、『摂津志』の記述の中で注目できる部分があり、それは「座摩社記作都下，又名渡辺」の箇所である。

「渡辺」は加地宏江，中原俊章らによる『中世の大阪 水の里の兵たち 』¹⁴⁾によって次のように説明される。

現在，堂島川にかかる渡辺橋（北区，朝日新聞社の北側）があるが，当時の渡辺はここではなく，もう少し上流の天神橋から八軒屋のあたりと推定されている。渡辺は大江渡とおおえのわたりもいわれ，また国府の渡，窪津とも呼ばれた。「摂津名所図会」によれば，八軒屋の右岸を北渡辺，左岸を南渡辺と称したという。渡辺は先に記したように，熊野参詣のコースで

あり、陸路の起点であった。京都から熊野へ至るまで、沿道には九十九王子社が設けられた。(中略)そしてこの九十九王子社の第一が渡辺王子社であった。

ここでは熊野社との関係が示唆される。また、同書では「渡辺党」が近世大阪の原型形成に大きく関わったとした上で、「渡辺」を以下のように総括する。¹⁵⁾

日本近代史学形成期の明治時代に、当時の文明史家山路愛山は、名著『足利尊氏』で、「侍に対する自由独立の営業者」を分類して、「野伏・非人・乞食・山賊強盗・あぶれもの」「傀儡師(人形つかい、遊女の一種)・遊君・傾城・白拍子」「連歌師・田楽法師(能・狂言の源流)・平家を歌ふもの(平家物語を語る琵琶法師)」「陰陽師(占いや祓いにたずさわる者)・医師」「農夫・漁夫・海人・樵夫きこり・番匠(大工)・刀鍛冶・鶴飼」「船頭かんどり・梶取」「商人」をあげている。こうした人々は当時の民衆そのものであり、その職種のほとんどは、交通・運輸・流通のかなめとしての大阪、水の神・和歌の神としての住吉社、浄土信仰の拠点である四天王寺と関わるものである。私たちがその形成から解体までを素描してきた渡辺党は、「侍」であり、かつこうした「自由独立の営業者」と密接に結びつく武士団であった。彼らはその多様な性格によって、つまり、国衛の在庁官人、御厨の供御人、港湾や関所の管理者、寺社の機構の構成者として、そして武士として、朝廷・公家・寺社・武家などの支配機構の一翼を担ったが、それと同時に、河海や交通路を生活基盤とする人々とつながることによって、その歴史を展開させたのである。

渡辺党をはじめとした「渡辺」を名乗る人々や、「渡辺」を拠点とした人々は上記のように多様な性質を持っているが、その性質は網野善彦の指摘するところの「異形の人々」にそのまま当てはまる。同氏の『中世の非人と遊女』¹⁶⁾は「異形の人々」の聖性と俗性を全編にわたって論証しているが、被差別民でありながら、同時に権力の非常に近い場所にいるというその特質は、「渡辺」においても極めて顕著であると言える。

ここで熊野との関わりが意味するところを確認したい。熊野に関して、作家、中上健次は次のように記している。

熊野に生まれて熊野に育ち、そこから離れて暮す私が、熊野を強く問うのは当然の事であった。しかもそこは「古事記」の神武東征の条り以来、歴史の積みかさなった時間のワープする無時間空間とも言うべき土地である。大和の背後であり、京都の後の闇であり、魑魅魍魎のバッコする陸の孤島たる瘴気充ちる熊野は、そこで生まれ育った者でもひとたび

離れると謎が満ちるのである。熊野は黄泉の国だが光が溢れ輝き、物という物が隈取り濃く在る。死は明るい南に口を開いている。熊野の波の打ち寄せる汀の向うには、常世が見え、まるで高僧らはその常世に向かうように補陀落渡海する。遠い昔の記憶だが私には数日前の出来事のようにおもえる、それらはことごとく相反している。¹⁷⁾

中上の文学的筆致による指摘に、鎌田東二は次のように付け加える。

ここで注目すべきは、火の力と火の祭りの見直しである。鞍馬にも火祭りが伝えられているが、それは熊野的なものの一ヴァリエーションであると彼らは考える。またアイヌにおいても、火の神が人間にもっとも身近で親しい神であったことが明らかにされ、縄文文化と火祭りもしくは火の神信仰との関連が明らかにされてゆく。¹⁸⁾

縄文的であり、同時に火に対する信仰があると指摘される熊野は、前出の八切によって次のように語られる。

(熊野信仰は)出雲族が紀伊に入植したときに、祖神を熊野大社を分祀したのだというが、実際は熊野灘には黒潮が突きあたって、上陸してきた拝火宗の者らの漂着地点なのである。¹⁹⁾

八切に関してはその研究に対する評価がいまだ定まらず、その言説をそのまま原典として引用するには問題もある。²⁰⁾しかしながら、郷土史家、菊池山哉きくちさんさいの研究²¹⁾を土台としながら、縄文的な文化が、大陸からの覇権によって討伐されながらも、抑圧を受けつつ、そのまま庶民の中に残り続けているとする思想は、地域の歴史を考える上で無視できない。前出の「渡辺」が、網野の指摘するところの「異形の人々」と一致し、同時に「熊野」と深い関係を結んでいたことは、偶然ではない。また、古く「渡辺」と称された地域、あるいはその周辺が、多く人形浄瑠璃の舞台²²⁾となったことも、傀儡師と渡辺の関係を考えるとき無視できない。また、傀儡師や遊君、傾城、白拍子がセックスワーカーであったことも注目に値する。岡本良一による『大阪の世相』には次のような記述がある。

宝暦六年(一七五六)「浪花色八卦」にはじまり、安永二年(一七七三)の「浪花今八卦」、天明四年(一七八四)の「浪花今いま八卦」とつづく八卦もの三書は、その標題からも察せられるとおり、同一の趣向をねらう姉妹篇ともいべきものであって、その内容は当時

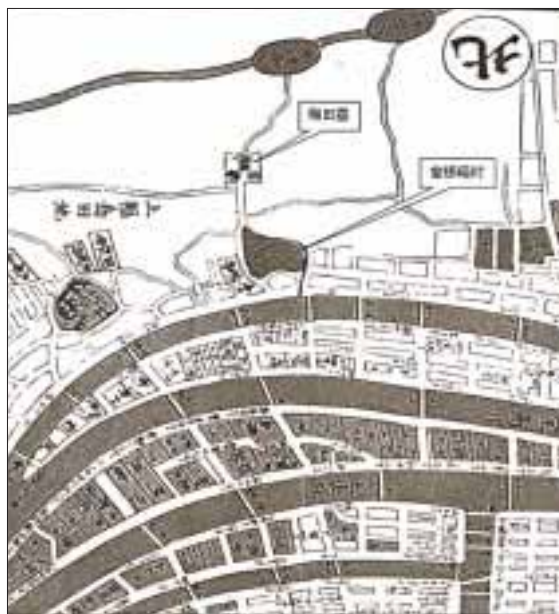
の大坂市中に散在した遊所の状況を紹介した一種の観光ガイドブックである。当時は田沼意次が老中として、それまでの緊縮政策を廃し、積極的な重商工義的政策を推し進めていたいわゆる田沼時代であって、大坂でもつぎつぎに設立を許された各種の特権的な株仲間が、幕府の手厚い保護のもとに、各種の市場を独占して大いに潤っていた時代である。そのためかねがね市民の間に潜在していた享樂的な気風は一段と高められ、市中各所の遊所はいずれもいっそう繁昌し、このような案内書が相ついで出るようになったのであろう。当時の市中の雰囲気を知るために、『今八卦』によって遊所の状況をうかがってみよう。(中略) 蜷川・曾根崎新地(現・北区)新町と京の祇園町の風を合わせたようなところである。女郎は一体にばいやりと角がない。(中略) こっぼり町(現・曾根崎新地) 蜷川の東に続く遊所であるが、うんと品が下がる。

社会的に抑圧され、八十島と称された湿地帯に拠点を置き、同時にセックスに関わる様々な職業にたずさわり、聖と俗の間を行き交い、熊野との密接な結びつきの中で芸能や工芸、商業に関わる。これらの様々な表象、言説の連関を、東京を題材としながら、中沢新一は『アースダイバー』²³⁾において次のように記述している。

歌舞伎芝居は湿地帯に成長する、縄文的想像力の芸能である。南北という人は、歌舞伎の人気台本作家として有名になったあとも、とりわけそういう世界とのつながりを、強く保ち続けた人だ。四谷の高台を散歩しているときにも、眼下に見下ろせる沢の底にできた細長いスラム街のことを、親しみをこめて見つめていたことだろう。回廊のように続く細長いその沢の南端に、たくさんの芸人たちの住む地帯がある。横山源之助の『日本の下層社会』で有名な鮫河橋界限である。いまは小さな公園になっているその狭い一角に、その頃は下級女郎の夜鷹がなんと四千人も商売をしていたという。その元湿地帯の上で、河原者の芸能は生き生きと想像力の羽根をはばたかせていたのだ。

のちの堂山町へと連なる、北野、曾根崎、兎我野といった呼称は、「渡辺」をはじめとした様々な表象の積み重なりの中で、その社会の中での位置づけを示している。そもそも、梅田という地名は「梅田墓地」(図1)として現れるが、「熊野は黄泉の国」とする中上の表象とも無関係であるとは言えない。

ここでは、熊野・異形の人々・遊女・芸能といったキーワードが、別所・渡辺・湿地・河原・墓地といった場所性の中に配置され、そのような表象・言説の来歴と系譜を、北野、曾根崎、兎我野といった地名が引き受けている。それらは「北野地区」であり、堂山町はその中に



(図1) 大阪細見図(1845)の複製, 古地図資料出版刊(1977)より

位置している。

現在堂山町を考える上で、セクシュアリティに着目した場合、当該地域を特徴付けている言説の1つは同性愛的言説である。堂山町には多くの同性愛者(とりわけゲイ、バイセクシュアル男性を中心としたMSM=Men who have sex with Men)向けの商業施設が集積しており、その規模はわが国でも新宿二丁目に次ぐ規模となっている。

堂山町を中心とした地域のゲイ、バイセクシュアル男性、あるいはMSM向け商業施設は、日々店舗の入れ替わりはあるものの、2005年の一年間を通して、常に150軒前後存在している。その分布は堂山町の町域を超え、兎我野町や万歳町、神山町などにも及び、いわゆる「北野地区」に広く分布している。

同性愛的表象の中で、「堂山」は堂山町の町域を示すものではなく、それら商業施設の分布する全体をおおよそ指し示すものとして用いられているが、そのことは同性愛的言説であるところの「堂山」の指し示す場所が、「北野地区」と重なることを意味する。

5. 「新宿二丁目」と「堂山」

ここまで述べてきたように、同性愛的表象と地域の関係に、「抑圧的言説」が大きなイデオロギーや権力機構の表象代表として、決定的な影響力をもつとする筆者の仮説は、東京のみな

らず大阪においても妥当する可能性は否定できない。

さらに、この二つの事例にはその「起源」に共通点がある。

現在新宿二丁目のある地域は甲州街道の宿場であったが、宿に関して網野善彦は次のように指摘している。

伝染するケガレに対する畏怖が、京都の貴族たちの間にひろがってくるのと時期を同じくして、非人といわれる集団が資料の上にはっきりと出てきます。(中略)京都の場合には清水坂が非人の一つの大きな拠点になっています。その場所を「宿」とよびます。²⁴⁾

また、当該地域は甲州街道が出来る前は中野村と呼ばれたが、これは今豊島区のある豊島と多摩の中間の野原という意味である。ここに室町期になって熊野の神官であった鈴木九郎という人が観音に導かれて移り住んで土地を開いたと伝承は伝えている。被抑圧的な場所性と「熊野」が、新宿二丁目の来歴にも現れる。このことは決して偶然ではないと筆者は考えている。

6. おわりに 都市と言説

鈴木博之は著書『東京の「地霊」』(1990)の中で、都市の歴史に関して次のように言及している。

土地の歴史という視点は、「地霊」という概念に、あるところまでゆくと突き当たる。地霊とは、「ゲニウス・ロキ」という言葉の訳語である。「ゲニウス・ロキ(Geniusloci)」とはラテン語である。この言葉のうち、「ゲニウス」という語は、本来の意味としては、生む人、それも特に父性を示すものであったという。この言葉がやがて人を守護する精霊もしくは精気という概念に移行し、さらには、人に限らずさまざまな物事に付随する守護の霊というものにまで拡大して用いられるようになった。「ロキ」というのは「ロコ(loco)」あるいは「ロクス(locus)」という言葉が原型で、場所・土地という意味である。つまり全体としては、ゲニウス・ロキという言葉の意味は土地に対する守護霊ということになる。一般にこれは土地霊とか土地の精霊と訳される。しかしながら、それは土地の神様とか産土神といった鎮守様のようなものとは考えられておらず、姿形なくどこかに漂っている精気のごときものとされるのである。ゲニウス・ロキとは、結局のところある土地から引き出される靈感とか、土地に結びついた連想性、あるいは土地が持つ可能性といった概念になる。²⁵⁾

都市の表象に関するこのような連想性は、筆者がここまで指摘してきたところの、「地域における表象（地域の様々な現象）は、その地域におけるイデオロギーや権力機構の表象を代表して現れたものであり、その地域の現在の政治性や、その地域の権力の来歴をそのまま表している。」という仮説の別の謂であろう。

いずれにせよ「新宿二丁目」や「堂山」が、町名を超えて表象としての代表性を獲得しながらも、その表象には抑圧の来歴が深く刻み込まれているという現実には、わが国における同性愛者の位置づけを端的に表している。様々な権利獲得のための運動や活動により、同性愛者のおかれている状況は劇的に改善していると筆者は考えるが、本当の意味でのリベレーションを可能にし、これから先の社会の中での有り様を考えようとするとき、言説の来歴を知り、抑圧の構造そのものが意図的で恣意的なものであることを知ることは、ミシェル・フーコーが指摘したように有効であろう。都市の系譜学はその意味で政治的な実践であり、地域の可能性を押し開く方法論の一つとして意味があるだろう。

註

- 1) 厚生労働省所管公益法人 財団法人エイズ予防財団 リサーチレジデント
- 2) Topology of Urban Migration and Social Transformation: A Case Study of Sexual minorities in Tokyo's 'Shinjuku' Area (名古屋大学国際言語文化研究科修士学位論文)
- 3) 伏見憲明「ゲイの考古学」による指摘など。
- 4) 青江忠一『地獄へ行こか 青江へ行こか』ぴいぷる社(1989)
- 5) 紀田順一郎『東京の下層社会』ちくま文庫(1997)
- 6) 売春施設は「ウリ専」と称される。「ハッテン場」は性的な関係を持つための出会いが可能な商業施設。
- 7) ソープランドは特殊浴場であり、「入浴」のための施設であるがゆえに売春防止法の規制を受けない。
- 8) 有坂隆道他『大阪府地名大辞典』平凡社(1983)
- 9) 宮本又次『てんま 風土記大阪』大阪天満宮(1982)
- 10) 近世、大阪城を中心とした町域は大坂町奉行支配のもとに北組、南組、天満組の三組に分かれ、総称して大坂三郷と呼ばれた。
- 11) 井上正雄『大阪府全志巻之一、巻之二』(1922)
- 12) 『日本古典文学大系』岩波書店(1977)、第六十七巻、403頁
- 13) 八切止夫『サンカの歴史』(1985)の作品社による復刻版(2003)326頁
- 14) 加地宏江、中原俊章『中世の大阪 水の里の兵たち』松籟社(1984)10頁
- 15) 加地宏江、中原俊章『中世の大阪 水の里の兵たち』松籟社(1984)127頁

- 16) 網野善彦『中世の非人と遊女』(1994)の講談社学術文庫による再版本(2005)
- 17) 梅原猛, 中上健次『君は弥生人が縄文人か』朝日出版社(1984), 中上によるあとがき
- 18) 梅原猛, 中上健次『君は弥生人が縄文人か』朝日出版社(1984), 鎌田東二による解説
- 19) 八切止夫『野史辞典』(1980)の作品社による復刻版(2003)244頁
- 20) 『検証八切止夫』歴史民俗学(2002)における礪川全次の指摘
- 21) 菊池山哉『別所と特殊部落の研究』(1966)の批評社による復刻版(1993)
- 22) 近松門左衛門『曾根崎心中』, 『心中天網島』『心中二枚絵草子』など, 曾根崎, 天満周辺が舞台となっている。
- 23) 中沢新一『アースダイバー』講談社(2005)
- 24) 網野善彦『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房(1991)
- 25) 鈴木博之『東京の「地霊」』文春文庫(1990)4頁 5頁